記憶と忘却

ワイズマンの一つの仕掛け

特集 ドキュメンタリー

福島真人 Masato Fukushima

九〇年代半ばの数年間、私は月に何回か、東京郊外のある精神病院に足しげく通っていた。といっても治療を受ける為ではなく、看護を中心とした日常活動を観察しに行っていたのである。現場では、多くの活動が蠢き、芋づる状に絡み合っているので、それを丹念にほぐしていくのが、私の仕事であったといえようか。

当時その病院は、まるで田舎の公立小学校のような、木造の古めかしい雰囲気が漂っていて、畳敷きの病室に何人もの患者が雑魚寝するというスタイルであったが、数年のうちに改築されて、見違えるようにきれいになった。というより、やっと平均的な普通の病院のようになったのである。

当初通っていたのは、比較的病状が安定した患者が多くいる開放病棟というところであったが、それでも、最初の印象は鮮烈であった。病棟の中央に真っ直ぐに延びる廊下をすれ違う患者達の独特な表情や歩き方、ナース・ステーションでの患者とスタッフの一つ一つのやりとり、そしてたまに起こるちょっとした諍い。微妙に崩れた感じがする印象を与える振る舞いの一つ一つが積み重なって、ちょっとした熱波のような経験として記憶に刻み込まれるのである。

こうした遭遇の初期段階では、そこで得られる印象はいかにも混乱していて、原色で書きなぐった抽象絵画のような風情がある。しかし訪問を何度か繰り返し、医療スタッフだけではなく、患者一人一人に対しても、それなりの識別が出来るようになってくると、やっと事態は落ちついてくる。廊下を行き交うのは、異形の群れではなくて、それぞれの個性ある人々であり、ちょっと前のめりにつっつっつっと爪先立った感じで転びそうになりながら、小走りに歩くAさんや、あるいは首を斜めに傾げて歩くBさん（彼は精神遅滞で、分裂病の患者ではないのだ）といった、それぞれの顔がハッキリしてくる。

もうそのころには、さすがに最初の衝撃は薄れて、漸く日々の活動の多くが持っている、潮の満ち引きのような繰り返しのリズムにやっと我々も慣れてくるのだ。

だがそれでも、ドキっとするような出来事が絶えないというのもまた実感である。開放病棟でもたまにそうした小さな事件が起こるが、やはり急性期の患者が多い閉鎖病棟は、雰囲気も一段とせわしなく、また何となく騒々しい。

調査を閉鎖病棟に移してからも、いろいろな出来事に遭遇したが、数ある印象的なシーンの一つとして私の脳裏に残っているのは、若い患者が外来で興奮して暴れ、それを複数の体格のいい看護士が抱え込んで廊下を横切っているという場面である。私はその時ナース・ステーションにいたのだが、外来部門から電話を受けた医師が、「どうも外来で興奮して暴れているから、じきにここに来るよ」とまわりの看護婦に伝えている。応援部隊として、この病棟の看護士も加わったようだ。しばらくしてドタドタっという音と共に、数名の屈強な看護士達が大きな丸太ん棒を運ぶように、細身の若い男を丸抱えにして病棟の廊下を横切っていく。茶髪にした頭だけが一瞬見えた。スタッフや他の患者が見守る中、興奮した患者の安静をおもにする、いわゆる隔離室に連れて行ったらしい。

それは一瞬の出来事だったが、こういう瞬間を目撃したのは始めてだったので、さすがにびっくりしてしまった。新しく入院する患者については、たいていは週毎の会議の報告を聞いて知るのが通例だったから、興奮した患者とのやりとりの結果、こんな形で運び込まれるという実例を目撃したのは先にも後にもこれが始めてである。

その後、この彼はどうなったのだろうか。次の週にその病棟を訪ねた時は、彼はまだ隔離室にいた。しかし興奮状態はすでに去り、病状はかなり安定している、との事であった。更に次の週になると、この若い、細身で茶髪の患者は、奥の方の観察室という病室に移って、時々ナース・ステーションにも顔を出していた。看護婦との会話ぶりを見ても、まだ何となく焦点が定まらないような感じで、ふらーっと入ってきては、ぼそぼそと何か呟き、またすーっと出ていってしまう。

一つの病棟に患者は七十人ばかりいて、しかも閉鎖病棟は患者の入退院が比較的頻繁なのだが、私がこの患者を記憶に留めているのは、この入院時の出来事が強烈な印象として脳裡に焼きついているからである。このイメージは相当強烈だったので、この病棟で目撃した様々な出来事を、視覚的に想起しようとすると、最初に思い出せるものの一つがこの場面である。だがそれを目撃した時から数年経った今となってみると、この映像を取り巻くいくつかの記憶が既に曖昧になっているのに気づく。

そもそも彼は何故入院する事になったのだったろうか。こうした説明は、いわゆる新患紹介という形で、入院後の病棟会議の冒頭で紹介される。Aさん、年齢二十歳、二男一女の長男、両親は云々、という決まったフォーマットで、家族背景や病歴、入院歴などが紹介される。それは確かに聞いたと思うのだが、もう細部は思い出せなくなっている。それに外来では、確

か本人が親に説得されて入院するといったような気がするが、何故興奮したのだったか、それも不確かである。いづれにせよこれらは全て伝聞である。つまり私は医者が看護婦にそう語っているのを聞いた覚えがあるのであり、それを本人とかに直接聞いた訳ではないのだ。

彼の入院後の経過の記憶も飛び飛びである。隔離室での彼の状態を私は直接見たわけではないし、彼の姿はその後にナース・ステーションでたまたま見かけただけなのである。だから私が確たる視覚的イメージとして記憶しているのは、何人かの看護士に抱えられた、その瞬間と、ナース・ステーションでのほんの数分の出来事であり、あとの記憶は、全て言葉による補足である。

私は映像的記憶と、こうした言葉による記憶のどちらが心理学的に永続性があるのか、よく知らない。だがこの彼の入院にまつわる、視覚的な記憶の一見しての異様さ、つまり興奮した茶髪の若者が、結構屈強な看護士に担ぎ込まれている、というこのイメージを理屈の上で緩和してくれているのは、その前後にある様々な間接的な情報である事は間違いない。「外来に来て、入院を説得されていた」という話、「隔離室で落ちついてきた」という話、そしてこういう事はたまにある、といった医師の説明。こうした付随する背景的情報によって、担ぎ込まれるシーンと、ナース・ステーションでのぼうっとした彼の姿が、一応、一つのまとまりをもったシークエンスとして理解されているのである。

一応、といったのは、時々そのシークエンスを支える筈の情報の記憶が定かでなくなって来ているからである。これはどんな記憶でも起こりうる事だろうが、ここでそれがちょっとした問題と感じられるのは、こうした忘却が、調査現場での経験を記録する時に、時として一つの具体的な困難をひきおこすからである。

この場合、私は辛うじて一つの印象的なシーンと、その前後にある、具体的な説明を記憶している。それは彼の入院にまつわる小さなストーリーとしてそれなりに記憶されている。だがそのストーリーの細部は既に少々曖昧になっている。彼は何故暴れたのだろうか。措置入院だったのか、それとも任意だけれど、暴れたのだろうか。安定剤は運ばれている時にもう打ってあったんだっけ。説明を聞いた覚えがあるが、確かでない。

病院での鮮烈な映像をいろいろと回想してみると、もうすでにそのいくつかは、文脈がよく分からなくなっているものがある。例えば、性格がきついのでちょっと苦手だったある中堅の看護婦が、別の中年の看護士と、ナース・ステーションの片隅の休憩室で何か大声で論じ合っている映像がある。論じ合っているというよりは、その看護婦がヒステリックに怒鳴っているというのが実情に近いのだが、何を怒鳴っているのか、よく思い出せない。そのうちにその看護婦の怒りが私に向けられて、私も何かの理由で怒鳴られたのだ。しかし何を彼女はそんなに怒っていたのだろうか。

病棟での経験は、こうした印象的な映像的シーンの堆積でもあるが、時がたつにつれ、それらのシーンを繋ぐ、意味論的なつながり、それを支える文脈的な記憶が曖昧になってくる。茶髪の新患のミニ・ストーリーは、まだ何となく一つの事象の連鎖として了解できていても、その連鎖を支える止め金の記憶が

段々と溶けはじめて、二つの映像がふらつきはじめているのを私は既に感じている。一方どなる看護婦の映像は、もう既にそうした文脈上のにかわを失い始めていて、私の記憶の中で浮遊しはじめている。これは一つの忘却の過程であるが、それと同時にこの看護婦の怒る表情そのものが、何となく夢の記憶に似てきて、何となく不条理で、辻褄が会わない、奇妙なものに感じられてくる。

私がワイズマンの映像世界に身を浸す時に、一番体に染みてくる印象の中心にあるのは、記憶を支える文脈上のにかわが溶けはじめる時の、この奇妙な感覚である。ワイズマンは、テレビでよく見かける標準的なドキュメンタリーが普通に用いるナレーションの類を一切用いない。彼のドキュメンタリーの大半は、複雑な構造をもった組織の、日常的な断片を一つ一つ、それぞれ何分といった感じの長さで追いかけている。それは会議の場面だったり、人が建物の掃除をする場面だったり、警官が路上の浮浪者を尋問するシーンであったりと、様々である。そのシーンが終わると、場面は次のシーンに文字通り音もなく移る。そこではまた別の活動、別のルーティン、別の会話が待っている。

∧『チチカット・フォーリーズ』
©BRIDGEWATER FILM CO.,INC.1967
写真提供㈶国際文化交流推進協会

彼の作品のいくつかのテーマでは、時間を置いてある特定の活動が飛び飛びに追いかけられ、そこで観客が、一応ある種の始まりと終わりを経験する事が出来る場合もなくはない。例えば私が最も好きな作品のひとつに、『動物園』という秀作があるが、この中では、当然ある動物園の様々な日常活動が、事細かに描写される。その中でも特に印象的な場面のひとつが、犀の出産を見守る動物園のスタッフの緊張感あふれるシーンである。これは結局死産で終わり、非常に落胆している彼らの様子が痛々しい。しかし別のシーンの後で、この死産した子犀は解剖され、殆ど標本の様になったその死体を囲んで、スタッフが笑顔で記念撮影をしている姿がうつし出される。そのギャップに、見ている我々も思わず笑ってしまうのである。この一連のシーンの連なりは、飛び飛びだが、一応最後まで追っ掛けられているので、何となく小さな物語の始まりと終わりを経験する事が出来る。だが多くの場面はそうした時間的完結性を持たない。いろいろな作品で、その組織の関係者の会議のシーンが延々と映し出され、動物園、コメディー・フランセーズ、ある

いは百貨店の経営問題について、議論が戦わされる。だがそれはそこで終わってしまい、その後話がどうなったのか、結局は分からない。まあそれはいいとしよう。しかし例えば『病院』で、危篤になった親にすがりつく娘のシーンが写り、あるいは医療刑務所を扱った『チチカット・フォーリーズ』で、医師達の前で診断される患者の姿が結構長く映し出される。我々が何となくそうした人々に感情移入しはじめ、そこに映し出され語られた人生の断片が胸に迫りはじめて来ると、映像はそこで終わり、別のシーンに容赦なく変わってしまうのである。

ワイズマンは説明をしない。多くのショットは比較的長回しなので、そこで人々が何を語り、何が問題で、何を怒ったり笑ったりしているのかは、見ているうちに何となくは分かってくる。しかし彼はそれ以上の手掛かりを殆ど与えない。もしワイズマンが我が精神病院に乗り込んできたら、外来で興奮しはじめている若い患者の姿を見つけて、それを追っかけ、看護士が外来にあつまり、すったもんだがあって、閉鎖病棟に連れ込まれ、バタバタと隔離室に押し込めるまでのシーンは、一気に見せてくれるだろう。医師と看護婦の会話の部分も映像に収めるかもしれない。しかし多分次のシーンは、恐らく、控室でぼんやり煙草を吸って、最近の若いスタッフの態度に愚痴をこぼしている別の看護婦のシーンではないか。勿論それは、さっきのシーンとは直接関係はない筈である。

このやり方は、似ているように見えても、私が茶髪の新患について記憶している姿とは異なっている。私の記憶は、まだまだ医師や看護婦の文脈的説明に塗れているからである。この文脈の記憶は、私が目撃した事態そのもののインパクトをそれなりに和らげてくれる。「こういうのは、たまにある」「任意で入院しようとしたら、興奮しはじめて、それで…」「彼は最近大分よくなったわ」

このシークエンス化がもたらす映像のインパクトの馴化をくい止めるには、逆にこうした文脈的な説明を消去する必要がある。だが普通意図的に忘却するというのは困難だから、それには時間がかかる。そうしたにかわが時を経て段々と剝がれ、映像だけが漠然と記憶に残るようになると、その事態の生々しさが、逆に鮮明に感じられるという事が我々の日常にもあり得るわけである。ヒステリックに怒る看護婦の表情は、私にとってはそうした忘却の効果が現れた、グロテスクな実例である。一体何をあんなにわめいていたのだろうか。あの表情。

ドキュメンタリーというのは、映像を媒介とした一種の記録、つまり記憶のようなものとしてイメージされるのが普通である。だがワイズマンのドキュメンタリーというのは、記憶というよりは、むしろ忘却のメカニズムというものが具体的にどう働いているのか、その作動の仕方を映像で示しているようなものであると、私には思える。ワイズマンの映像を見ながら、我々は組織の日常的ルーティンについての、分かりやすい説明や、常識的な解釈を、一つ一つ忘れていくという過程を実は追体験しているのである。

忘れていくことによって、個々の場面は、そのより大きな文脈的な支えを失い、そのそれぞれのタイトル、例えば『動物園』や『百貨店』といった組織や場面全体の支え以外には、ハッキリとした支えを持たない記憶の連鎖になる。タイトルに象徴された組織や対象の中で蠢く、様々なルーティン、活動、事件、それらのグロテスクでもあり、当たり前でもあるという性格が、忘却という我々の心的な装置の仕組みによって明らかにされてくる。

忘却はそれが過度になれば、記憶の損傷として、一つの障害と見なされる傾向がある。実際、脳の損傷や痴呆は、具体的には記憶する能力の欠損というかたちで現れる事が多い。しかし実はそれは事態の一面を示しているに過ぎない。忘却は、それによって我々が日々の知覚の残存を取り除き、新たな事態に取り組む事が出来るための必要不可欠なメカニズムである。もし記憶が溢れだし、我々の知覚そのものを脅かすようになれば、日常生活そのものも危うくなってくる。実際、ロシアの心理学者ルリアの有名な『偉大な記憶力の物語』という本は、異常に高い記憶力を持った人間の、痛快なモノグラフであるが、こうした強烈な記憶能力が、彼の日常生活を脅かす様子もそこに垣間見る事が出来る。例えば子供の頃、彼が時計を見ると、九時の筈なのに、七時半に見えるというのだ。記憶、あるいは想像のイメージが、彼の現実の知覚を浸食しているのである。

我々がこうした事態に陥らずに済んでいるのは、大抵の記憶が忘れ去られ、必要な時にしか出てこないという過程による。にもかかわらずこうした忘却の能力の重要性が消極的にしか捉えられていないのは、忘却の心理学といった項目が殆ど存在しないのを見ても分かる事である。

ワイズマンが卓越しているのは、忘却するという我々の能力とそれがもたらす深遠な効果を、ドキュメンタリーという、一見記憶の装置のように見えかねない媒体を使って示してくれる、その離れ業によってである。彼が切り取ってくる、様々な人生の形の断片は、一つのシークエンスになり切れずに、ある意味で容赦なく消えて行く。それはあたかも、初めから忘却のために仕組まれた様でもあり、そこには、その副産物としてのいろいろな効果が織り込まれている。そしてそれはグロテスクでもあり、少し切ない快楽でもあるのだ。だから、これほど生々しいシーンを立て続けに長時間見せつけられながら、何とも夢見心地で我々が会場を後にするのも、まさにワイズマンの仕掛けに、我々もまんまとはまってしまうからだろう。

『病院』
©ZIPPORAH FILMS, INC 1970
写真提供(財)国際文化交流推進協会

7月25日〜8月10日（7月28日、8月4日休館）まで、アテネ・フランセ文化センターにおいて、「フレデリック・ワイズマン映画祭」が開催されます。